北陸石仏の会々報

第19号
平成11年4月8日発行

編集発行
北陸石仏の会（日本石仏協会北陸支部）
代表　久世　嘉太郎
〒939-1315　富山県砺波市太田一七七〇　尾田武雄方
電話　〇七六三―三二―二一七七二
振替　〇〇七四〇―二―一一九七四

石仏はマニアの世界か

石田哲弥

「石仏はマニアの世界では？」との問いを新聞社の方からされました。つまり石仏は一部の人々による趣味の世界ではないか、とのことでした。たしかに歴史の表舞台を歩いてきた仏像に比べ、石仏は路傍にたたずむ、いわばマイナーな存在といっていいでしょう。こうした地味な存在、石仏に目を向け、こつこつと訪ね歩いている姿を、一般の人々は「マニア」ととらえているのかもしれません。

マニアーそれにしてもショッキングな言葉ではないですかー

石仏が野の仏の源流として定着を見せたのは平安末期から鎌倉時代のこと、奈良周辺の山岳地帯でのことでした。磨崖仏に始まり、やがて石仏へが主流に、また主尊は当初阿弥陀如来や弥勒菩薩でしたが、やがて室町時代には地蔵尊へと変わっていきました。ところが関西以外において地蔵信仰が見られるのは室町時代末期のこと、しかも庶民の信仰として花開くのはさらに遅く、江戸時代に入ってからのことでした。よく、地蔵信仰は「平安時代に盛んに……」とありますが、それはあくまでも京都・奈良を中心とした地域でした。

次に発展したのが庚申信仰で、〝全国津々浦々〟にまで広がった信仰でしたが、その伝播の様相は東京を中心に群馬、新潟県の関越道および静岡に向う東海道、そして奥羽道と三方に向かって、まさに〝うねりのごとく〟でした。

そして道祖神。江戸時代中期に地蔵尊や庚申塔の隆盛下の中で、静岡・神奈川の太平洋沿岸に地蔵尊を模倣して起こりました。そして山梨、群馬、長野を経て富山・新潟に至る関東甲信越を横断し、しかも伝わっていく過程で単体・双体道祖神の合掌像から男女の像、そして握手、祝言、抱擁へと変容していきました。「地蔵尊はサイの神と習合、継承した」といった定説とは逆の結果でした。こうして庶民と織りなしてきた歴史の中で、隠れた目でじーと世の中を見つめ、自由を求めていた姿が見とれます。仏像ははたしてこのように生き生きと、しかも克明にその歴史や庶民の心を追うことができるのでしょうか……。

一見マイナーな存在で、マニアの世界のようにも見える石仏。

しかし、その存在は想いも及ばないほど深く、限りない世界でした。

このたび発刊した『越後・佐渡の石仏』は、そうした石仏への歴史から学んだことや、想いを書き綴ったものです。そして今日もまた新しい世界の窓を開き、石仏と対話をしています。

新潟県最古の地蔵尊
（逆修塔）大永6年（1562年）
東頸城郡安塚町

富山市南部の異形三尊石仏

平井一雄

三尊石仏は普通、阿弥陀三尊として阿弥陀如来を中心に勢至菩薩・観音菩薩を脇侍仏として造られ、三界万霊、疫病退散を願い村の霊地に祀られることが多い。江戸時代末期から明治にかけて造られ大山町を中心に富山市南部・大沢野町東部・立山町にかなり建立されている。特に富山市石屋の石工、三代　牧喜右衛門の作が多い。三尊石仏はほとんど石工銘が刻まれている。

一、準胝観音三尊仏

写真1は富山市月岡地区の深山家墓地にある三尊石仏、牧喜右衛門作ではないが鑑賞に値する名品だと思う。主尊は準胝観音、脇侍は向かって右は薬師如来、左は十一面千手観音のように見える。ちょうど近くに農作業をしておられた深山家の家人に聞いた。病気平癒を願うとき、人に見られないようにして拝むと効験があると聞いていると言われた。まさに宗派にとらわれない現世利益を願う民間信仰の石仏として明治十七年三界万霊と刻まれた台座の上に建立されたものである。

写真1

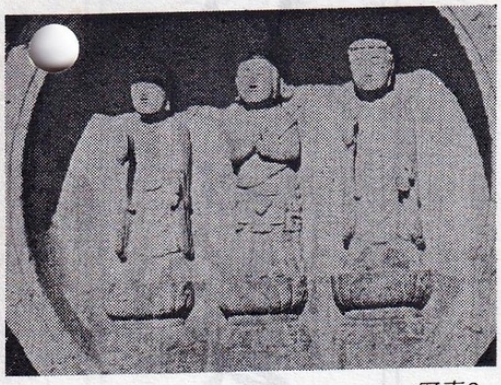

写真2

二、大日如来三尊仏

写真2は同じ月岡地区の仏光寺前にある三尊仏。主尊は金剛界大日如来右、左の像は印相が同じで区別できないが阿弥陀如来と釈迦如来であると思う。ここにも真言宗・浄土（真）宗・曹洞宗すべての宗派の人々を救済する三界万霊の思想が生きている。

三、釈迦三尊仏・聖徳太子三尊仏

写真紹介は次の機会にするが富山市新保地区には主尊を釈迦如来、右に阿弥陀如来、左に不動明王を配する三尊石仏と主尊に聖徳太子、右に阿弥陀如来、左に観音菩薩を配する三尊石仏がある。それぞれ当時の人たちが財力を傾け、切実な願いを込めて建立された石仏である。

第十九回例会報告
「砺波の石仏探訪」

尾田武雄

秋晴れの平成十年十月二十五日、富山県砺波地方の石仏探訪が行われた。ちょうど砺波郷土資料館では『千体の石仏を刻んだ明治の石工　森川栄次郎展』が開催されていた。午前中はそれを拝見した。天保十年に砺波郡茶木村の谷内家の生まれ。幼少期に金屋村の石工栄次郎の弟子になり、石工の腕をかわれて森川家の養子になり、のちに二代目栄次郎を襲名した。

その仕事ぶりは実直謹言、無駄なことはなにひとつしゃべらず、ひたすら石を彫ることに没頭した。彼の刻んだ石仏は、砺波地方に千体あるといわれ、その流麗な作風に魅せられる人が多い。

当日は、その栄次郎の作品を中心に探訪し、その石材である金

屋石の採掘現場近くまで行き確認した。参加者の多くは石仏の美しさに驚嘆していた。また商都高岡と真宗の瑞泉寺のある井波を結ぶ中筋往来の三十三ヵ所観音や、真言宗萬福寺の石仏などを拝見した。ここでは珍しい可愛い馬頭観音に出会った。

北陸石仏の会第十九回例会出席者

◇富山県
加藤永子
藤田正時
斉藤善夫
平井一雄
小竹一夫
中川　達
岡田静子
南　金三
柳沢栄司
尾田武雄
島倉初美

◇石川県
南　外志雄
滝本靖士
久世嘉太郎
上田信子
芝田　悟

◇福井県
北村市朗

〈石仏紹介〉9

立山参詣道三十三番観音

佐藤武彦

岩峅寺から立山に続く参詣道に、文化八年と刻む西国三十三所観音の分霊観音石仏が三十三体、道標のように建てられていた。

然しいつしか八体が行方不明になった。平成五年七月十一日、たまたま雷鳥調査の折り、雪の解けた尾根の陰に、その内の一体三十三番十一面観音石仏に出会う事が出来た。富山県歴史の道調査報告書ー立山道ーに、広瀬誠先生が「左手の傾斜した草原に昭和三〇年代まで石仏（文化八年　施入者飛州高山　河口源四郎）があって風情を添えていたが、現在は見当らない」と記し、懺悔坂の石仏K2として写真を載せられているが、まさしくその石仏であった。

（富山県ナチュラリスト協会副会長）

北陸石仏の会第二十回例会案内

◎月　日　平成十一年五月九日（日）　雨天決行
◎集　合　午前七時〇〇分　ＪＲ富山駅北口
　午前八時〇〇分　ＪＲ砺波駅
　午前九時一〇分　ＪＲ金沢駅西口
　午前九時五〇分　ＪＲ小松駅
◎解　散　午後三時三〇分　ＪＲ大聖寺駅
　福井方面から参加される方は、ＪＲ小松駅集合ＪＲ大聖寺駅解散となります。ご注意ください。
◎参加費　五〇〇〇円（金沢、小松、大聖寺）
　六〇〇〇円（富山、砺波）
　バス代、拝観料、資料代を含む
　昼食は各自持参してください
◎申込み　次の事項を記入の上必ずはがきで
　住所・氏名・電話番号・集合場所
・事務局
　〒九三九－一三一五
　富山県砺波市太田一七七〇
　北陸石仏の会事務局　尾田武雄
　ＴＥＬ・ＦＡＸ　〇七六三－三二－二七七二
◎〆切り　四月三〇日（金）

☆見学予定

○小松天満宮〈小松市上牧町〉
　十五重石塔、願かけ撫で牛　など
○那谷寺〈小松市那谷町〉
　弁財天、毘沙門天、青面金剛（庚申様）、七重石塔など
○明王寺〈加賀市大聖寺西町〉
　青面金剛（庚申様）、西国三十三所観音など
○全昌寺〈加賀市大聖寺神明町〉
　六地蔵石幢、五百羅漢（木像）など
○実性院〈加賀市大聖寺下屋敷町〉
　西国三十三所観音、大聖寺藩歴代藩主墓所など
※諸事情により見学地を変更する場合もあります

ご案内

・現在新潟県石仏の会会長、日本石仏協会理事、新潟県民俗学会評議員の石田哲弥さんが、新潟日報時業社から『越後・佐渡の石仏』を発刊されました。これは新潟日報連載の「街道の風景」を整理編集されたものです。九十四項目にわたりわかりやすく、またビジュアルで誰にでも読める楽しい著書となっています。カニの寒念仏、猫又権現、西行法師、風神、白山権現、など珍しい石仏が紹介されています。新潟の石仏巡礼に好著で、当会の推薦するものです。
　なお、石田哲弥さんは環日本海歴史民俗叢書『石仏学入門』（高志書院）の著書もあります。これは目次によると石仏の歴史、石仏入門、石仏学の周辺等々あります。これらは『日本の石仏』などに載った論文を抜粋されたものです。
　①『越後・佐渡の石仏』　定価　一八〇〇円＋税
　②『石仏学入門』　定価　四八〇〇円＋税
　※送料込みで①は二〇〇〇円、②は四八〇〇円
　①と②を二冊まとめると、六五〇〇円で提供されるそうです。
　お問い合わせは著者まで
　新潟県栃尾市平二－五－七
　石田哲弥
　ＴＥＬ　〇二五五－五三－三四二〇
　ＦＡＸ　〇二五五－五二－一〇二八

・『富山写真語　万華鏡85　水天の石仏』が発刊されました。佐伯安一さんが「水の神さま仏さま」・尾田武雄さん、平井一雄さんが「水源・源流のほとけ」を執筆、写真家風間耕司さんの写真が素晴しい。定価五〇〇円、事務局にて取り扱っています。

平成十一年度の会費を同封の振り込み用紙にて送金下さい。